

企業連携を通じた美術領域の可能性

The Potential of the Art Field through Cooperation of University and Private Sectors.

美術学科・デザイン学科・写真映像学科

井上 友子・佐藤 佳代・青木 幹太・星野 浩司・荒巻 大樹

Tomoko Inoue / Kayo Sato / Kanta Aoki / Koshi Hoshino / Daiki Aramaki

1. 研究の背景

本研究は、2010年3月に発行された日本デザイン学会誌『デザイン学研究特集号』に、論文「北部九州における伝統的織物のパタンデザイン—博多織を中心に」を寄稿し、学術的な公表をしたことに始まる。そしてその後、日本デザイン学会春季研究発表大会での口頭発表と芸術学会研究報告書への掲載等、毎年行ってきた成果報告の延長線上に、本研究は位置している。

本研究は伝統的工芸品／博多織を対象とした企業連携型実践教育プログラムの実施である。伝統的工芸品とは、昭和49年5月25日に施行された伝産法に基づき指定された215品目（平成25年4月1日現在）を指し、福岡県はそのうちの7品目を有する。7品目の伝統的工芸品には、織物2品目として博多織と久留米絣が含まれる。

他地域と同様に福岡でも、時代の推移に従い生活様式の変化、安価な輸入品の増大等の影響を受け、伝統的技術・技法によって製造される高度な手仕事作品の需要が低迷している。それに伴い生産額の減少、後継者不足、伝統技術の衰退など喫緊の問題を抱えている。

博多織を例に挙げてその生産額の推移を見ると、平成11年度から23年度までの12年間に37.2億円から28.6億円と23.1%減少しており、前年度比でさえ1.7%の減少と歯止めのかからない状況に陥っていることがわかる（図1）。

福岡県では平成16年度から「地場産業の振興」を目的とし、(1)地域ブランドの創出 (2)伝統工芸産業の振興などを掲げ、様々な取り組みを行っているが、これといった効果のあがらないまま、結果として大卒者の地元就職難を引き起こしている。

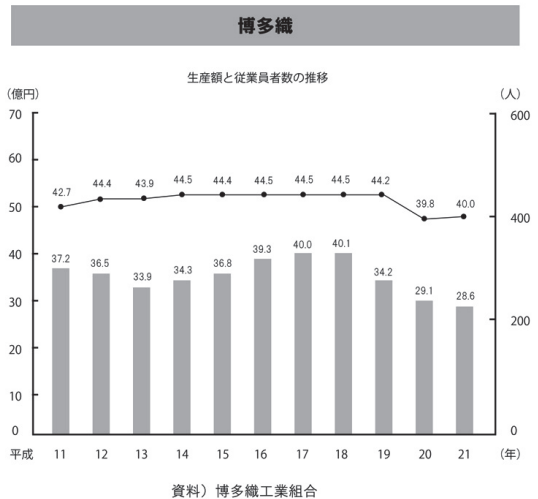


図1 博多織の生産額と就業者数の推移

なお、本研究は科学研究助成事業（学術研究助成基金助成金）課題番号24653238の助成を受け、研究課題名「芸術学部に於ける地場産業活性化のための実践的領域横断型プログラムの開発と構築」として研究を行った。

2. 研究の目的

以上のような深刻な状況を背景に、現在にいたるまでの5年間、芸術学部教員は伝統産業及び地域産業の振興を目指した様々な教育を試みてきた。

その中から、本研究が報告として取り上げるのは、博多織を素材とし、企業連携を基本とした芸術教育の効果の検証とそのプログラム化の模索である。

本研究活動が目的とすることは、机上や正規のカリキュラムでは修得することが困難な実学を、大学内外で学生に体験させることにある。この活動を通して学生が身につけることは、社会意欲、コミュニケーション力、忍耐力、応用力などであ

り、また体験することは、生産性や市場ニーズなどを鑑みた、現実的な創作活動である。

美術領域の基本的学習理念は、個々の感性を追求することを命題としたカリキュラムを組んでおり、個性や感性を磨くことに重点が置かれている。それは一方で、社会貢献や市場ニーズを前提とした思考の鍛錬まではなかなかたどりつけないまま学部の4年次を迎え、そのまま就職活動に臨むことにもつながりやすい。

そこで筆者は、正規のカリキュラムで十全な芸術的感性を磨き、さらに企業連携活動で社会性を身につけるとともに、それらを社会に還元する知識や技術を修得することを可能とする次世代型学部教育を目指し活動を行っている。それは、突き抜けた感性の深層に迫りながら、同時に社会に出るための心と思考の準備も行うためである。そうすることで、芸術教育の理想的姿が成就されると考えている。

本研究は、5年間に渡る前研究の実績から、官(行政)や工業団体から高く評価され、いくつかの商品化事例もある。また九州のみならず、東京での展示会や広報活動を実施するなど、福岡の伝統産業を広く周知する活動を行ってきた。これらは、次第に芸術学部の特性ある教育として定着しつつあり、入学を考える高校生が知る存在にもなりつつあり、受験動機の一つとなっている。

本研究活動に参加した学生の中には伝統産業や地域産業に関心を抱く学生も現れ、人材育成にも貢献している。これらは以下の図2(学術的特色)にあるように産と学を大学がつなぎ、デザインの実践的学習を経て形となった成果を展示・公開し、伝統産業の啓発と地域産業の広報を行い、人材育成にも貢献する。すなわち、生産者とユーザーとの間にある意識と価値観のずれや溝を実践的な教育を活用して埋め、時代が要請する次世代型デザイン教育のノウハウを美術領域のスキルを用いて確立する。このような取り組みは多くの大学で試行しているが、実際に商品化に結びつく活動は稀有であるため、本研究は更なる挑戦的試みによる良い先行例となることを目指している。

学術的特色

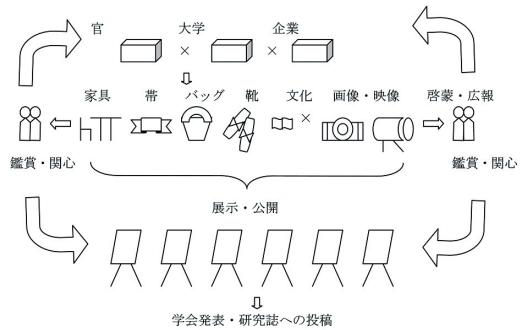


図2 学術的特色

3. 研究方法

本研究は、伝統文化／地域産業の振興を素材とする次世代型芸術教育の実践であるため、企業参加が基本である。大学と企業が協同で一つの目標に向かって歩むため、大学側の論理は通用しない場合が多い。企業は生産性や功利性を基本とし、利潤計算をもとに生産化計画を進めていく。一方大学では純粋にアカデミックな教育を基本とし、それ以上に踏み込むことがいささかばかられる傾向がある。しかし、時代の変化が激しく、価値観がめまぐるしく変わる中で、卒業時の学生の要望や要求も現実直視したものへと変化しており、その結果、芸術教育のありかたそのものが問われる時代が到来しているのである。かつて美術志向の強い学生に共通してみられた「就職への無関心」が、昨今では数を減少させているといっても過言ではない。

そこで、企業実態を知り、どのような準備をすれば社会に求められる人材となりうるのかを学ぶ場として企業連携活動が最も有効な手段となりうるのである。

まず、協力企業と打ち合わせを行い、年度計画を大枠で決定する。その過程で企業が何を望み、どのような製品のコンセプトを企てているのかを知り、前年度末と当該年度当初に学生募集を行う。参加意思を示した学生には、正規授業を優先させること、途中で脱落しないこと、休暇は望めないこと、仲間同士助け合うこと、苦手なコンピュー

ターの基本技術を習得してもらうことなどを説明し、社会に出るための力をつけるトレーニングであることを周知する。その際、前年度の活動成果を提示し、様々な経験を通して企業とコラボレーションを行い、最終的な成果報告会に向かって協力作業を行い、それらが同時に社会貢献を意味することを理解してもらうのである。

本研究は図3に示すワークフローに沿って進められた。共通する時間的な流れや事柄の他に、プロジェクト毎に設けたいくつかの行事を平行して実施し、年度末には商業施設で展示会を実施することで本研究成果を福岡市民他に広く報告するという計画である。

成果報告の期間内には、新聞やニュースに取り上げられることも多く、本研究の協力企業が紹介されたり伝統産業の実情などが報道されるなど、市民に対する啓発活動の一部を担うことができる。

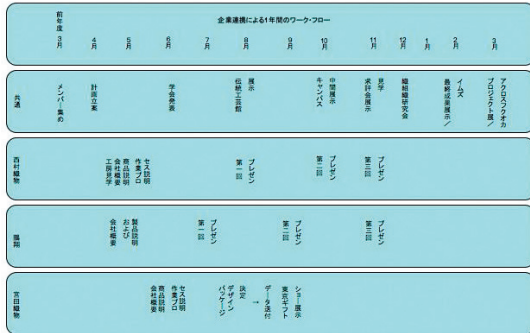


図3 ワークフロー

本計画のカテゴリーは、博多帯柄デザイン考案プロジェクトと久留米絣商品のタグおよびパッケージ考案プロジェクトに分類される。帯柄デザインの協力企業は本研究年度で3年目の連携となる西村織物株式会社と同じく3年目となる鵬翔株式会社、商品パッケージを提案する企業は久留米絣と広幅織物製作会社の宮田織物株式会社である。

それぞれ前年度の3月から参加学生を募り計画の概略を説明した。4月には企業とともに計画の立案に着手し、年度目標を定め、企業のニーズを取り入れる。5月には企業および工房見学や商品

説明を実施し、それぞれ図柄やパッケージ・デザインの企画作業に入る。6月にはプロジェクトを担当している教員が前年度の成果をデザイン学会で発表し、他大学の同様の活動を確認し、今後の参考にする。7月から11月にかけて企業に対する学生プレゼンテーションを3回ずつ行い、各回の講評を参考に最終デザインに向かった調整を行う。その間に、オープンキャンパスの機会を利用して大学内ギャラリーで中間展示を行い、高校生や高校教諭の反応を確認する。また、久留米絣パッケージ・デザインについては、東京ギフトショーに出展し、参加企業の講評を参考に最終的な改良を行う。11月には博多帯と着尺の新柄発表会を見学し、流行や趨勢、業界全体のニーズなどを推し量る。12月には「織り」の組織の勉強会を通じて、博多織の職人技術を学ぶ。

以上のようなプロセスを経て、協力企業による製品の完成を待ち、2月の最終成果報告会に臨み、3月の他学部との合同プロジェクト展を開催する。

4. 研究結果

博多帯柄デザイン考案プロジェクトでは、西村織物株式会社による7点の商品と鵬翔株式会社による3点の商品、合計10点の商品が製作された。宮田織物による裨纏タグは実用化されたが、パッケージは試作にとどまり現在も実用化に向けて調整中である。

図4-1~4-9 (左：原案、右：製品、裨纏タグについては左上：旧デザイン、右上：学生案、下：裨纏製品につけた新タグ) に示すように、西村織物株式会社による7点の商品化のうち、1点は八寸名古屋帯、6点は半幅 (小袋) 帯であり、鵬翔株式会社による3点の商品化はおしゃれ着用袋帯である。いずれも商品として市場に出回り、西村織物の八寸名古屋は10万円ほどで売買される予定で準備が進められ、小袋帯は6配色でそれぞれ30本ずつ合計180本が制作され、29,800円で販売されている。また鵬翔株式会社の商品はそれぞれ15本ずつ制作され、23万円から28万円の価格で販売されている。宮田織物の裨纏用タグとパッ

ケースは、前者がすでに裃纏製品にタグとして縫い付けられ、後者は現在ギフト用パッケージの実用化に向け、最終調整の段階である。

本研究活動に参加した学生は1年を通して「モノづくり」と「市場ニーズ」「ユーザーの要求」「採算」「利益率」「下請けの事情」など、作り手とユーザーとの関係を構築する様々な要件を学び、「モノづくり」の原点と目的を学習した。

学生は、正規カリキュラムでは学ぶことが難しい、企業論理や社会システム、さまざまな条件がかさなることによる製品化に至るまでの諸問題など、実践的な学習を企業の指導のもとで学んだ。アカデミックな環境では決して体験することができないような企業の事情やジレンマなどに悩み、自己解決が導きだされるまで、あきらめない強さ



図4-2

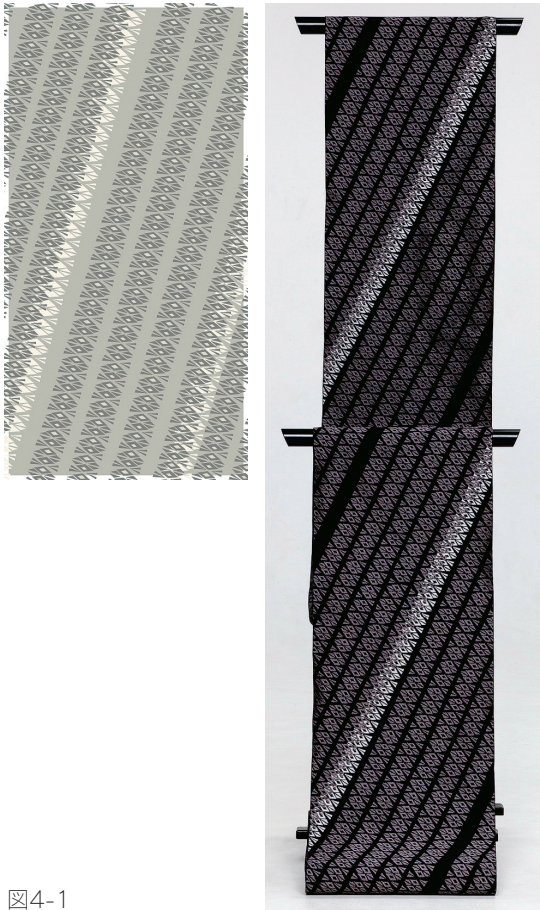


図4-1

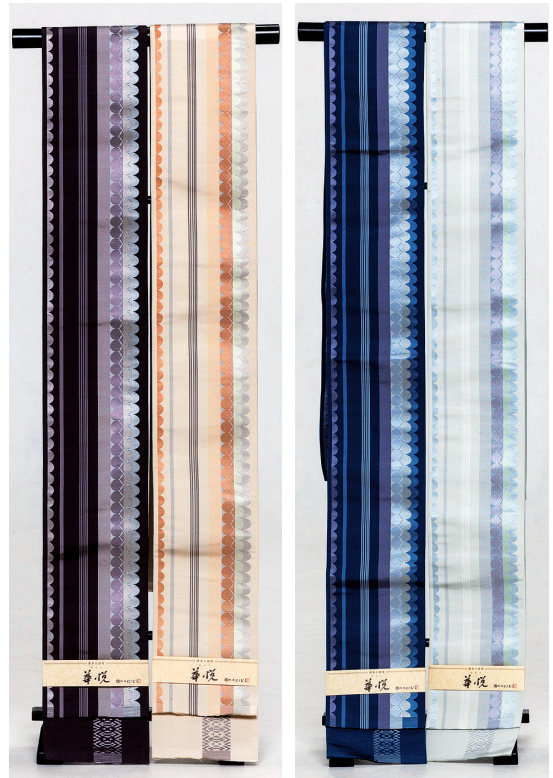


図4-3

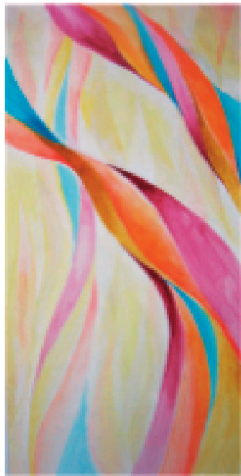


図4-4

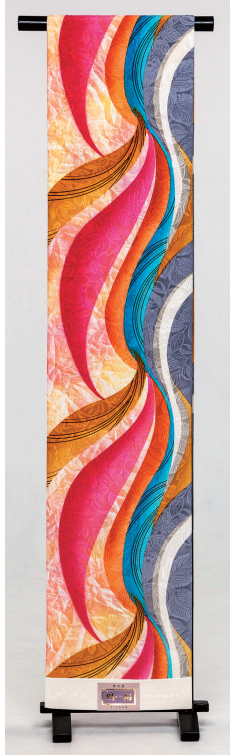


図4-6

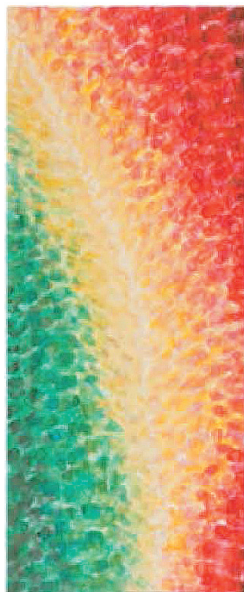


図4-5

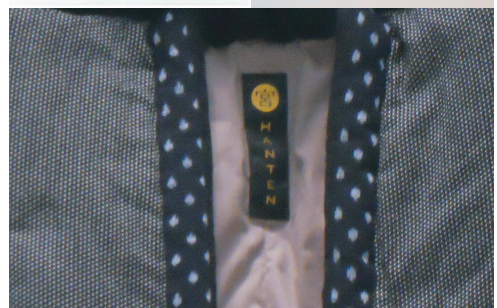


図4-7 左上：旧タグ、右上：学生案タグ
下：裵纏製品につけられた新タグ



図4-8



図4-9

と、しぶとさを修得し、状況によって臨機応変に対応する柔軟な力を身につけた。

この活動を通して、学生たちが大学という場と企業という厳しい場を行き来しながら、実践的即戦力を修得する良い機会を得たことは間違いない。本研究成果は、本学オープンキャンパスの期間を利用して大学美術館オープンスペースに中間成果を展示報告し、本学教職員、高校生、引率教諭から寄せられた良い反応を確認している。その後、2月26日から3月4日まで天神地区の商業施設IMSで展示し、さらに、他プロジェクトとの合同展をアクロス福岡で開催し、メディアにも取り上げられている(図4-10)。

なお、2012年度の研究成果は、年度が改まった2013年8月1日から13日の期間で博多伝統工芸館に展示され、その後8月24日から9月9日に

は、福岡市、九州大学、デベロップメントカレッジ、工業組合などと合同で、六本木の東京ミッドタウンで開催した「新・博多粹伝」に参加した(図4-11～4-14)。



図4-10 博多経済新聞2013年8月2日



図4-11 博多伝統工芸館での展示



図4-12 博多伝統工芸館での展示



図4-13 ミッドタウン、デザインハブ入り口



図4-14 東京ミッドタウンでの展示

まとめ

大学は、最高学府としてアカデミックな教育を学生に提供する役割を担うことに自負や自尊心をもち、貴重な4年間を「学問」に費やす特権を学生に与える場を提供している。

一方、地域の伝統産業は、長引く不況と生活システムの変化にともなう購買力の低下・購買意識の変化に喘ぎ、新たな人材を迎え入れる経済的余力をなくしつつあり、産業の持続や継承さえも危ぶまれる傾向にある。幸運にも新社会人を受け入れる体制が整ったとしても、新卒者のために研修期間を設けるなどの時間的・経済的余裕のある企業は残念ながら稀有である。このような時代の移り変わりの中で、企業の求める学生像に変化が生じはじめ、「即応力、即戦力」が求められるよう

になるのは当然の理であり、結果、採用の決め手となりつつあるのである。

このような状況下にあつて、大学教育はこれまで以上に即戦力を修得した学生の育成に迫られている。大学で学んだ専門知識を社会や会社のニーズに合わせてどのように使い、どのように発展させて行くのか、またどのように新たな価値を作り、役立つよう工夫するのか、大学はその実践を学生に学ばせる場としての役割を担っているのである。

以上のような意味で、本研究の目指す教育やそこから得られる成果は、まさしく会社が求める学生の育成や、社会に貢献する人材を育てるものであると考えている。

参考文献

井上友子、青木幹太、星野浩司、佐藤佳代、荒巻大樹「地域産業振興とその人材育成を目的とした取り組みⅡ」『九州産業大学芸術学会研究報告』第44巻89ページ～102ページ、九州産業大学芸術学会、2013年3月1日

井上友子、青木幹太、星野浩司、佐藤佳代、佐藤滋、荒巻大樹「地域産業振興とその人材育成を目的にした芸術学部の総合的取り組み」『九州産業大学芸術学会研究報告』第43巻93ページ～108ページ、九州産業大学芸術学会、2012年3月1日

参考資料

佐藤佳代「地域産業プロモーション計画1」(1)、日本デザイン学会第60回春季研究発表会『デザイン学とデザイン』概要集、筑波大学、2013年6月23日

井上友子「地域産業プロモーション計画1」(2)、日本デザイン学会第60回春季研究発表会『デザイン学とデザイン』概要集、筑波大学、2013年6月23日

星野浩司「地域産業プロモーション計画1」(4)、日本デザイン学会第60回春季研究発表会『デザイン学とデザイン』概要集、筑波大学、2013年6月23日

隈元あゆみ「地域産業プロモーション計画1」(3)、
日本デザイン学会第60回春季研究発表会『デザイン学とデザイン』概要集、筑波大学、2013年
6月23日

佐藤佳代「博多織プロモーション計画4」(1)日本
デザイン学会第59回春季研究発表会『地域社会
と横断型デザイン』概要集、札幌市立大学芸術の
森キャンパス、2012年6月24日

井上友子「博多織プロモーション計画4」(2)日本
デザイン学会第59回春季研究発表会『地域社会
と横断型デザイン』概要集、札幌市立大学芸術の
森キャンパス、2012年6月24日

青木幹太「博多織プロモーション計画4」(3)日本
デザイン学会第59回春季研究発表会『地域社会
と横断型デザイン』概要集、札幌市立大学芸術の
森キャンパス、2012年6月24日

星野浩司「博多織プロモーション計画4」(4)日本
デザイン学会第59回春季研究発表会『地域社会
と横断型デザイン』概要集、札幌市立大学芸術の
森キャンパス、2012年6月24日